



もう寝なきや。そう思いながらソファでマンガを読んでいたら、

「ほーい、みやげだよー」

おじいちゃんが、リビングのドアをあけた。手に大きな紙袋をさげている。

「えっ、なにに？」

台所から、ママとおねえちゃんもやってきた。今夜、おじいちゃんは、町内の集会に行っていたんだ。

「へへ、カラオケ大会、一等賞の賞品だい」

おじいちゃんが、ぼくの横にすわった。

「すごい！」

「みんなが、いらんいらんというから、わしがもらった」
えっ——ぼくとおねえちゃんとママは、顔を見あわせた。

「趣味じゃないんだと。だからわしが賞品だけもらった」
ケプツとお酒くさい息をはきだして、おじいちゃんは、紙袋に手をつっこんだ。

「ほーれ、七福神だ」

おじいちゃんがひっぱりだしたのは、木でできた置物。

「福をよぶ神さんだぞ」

ドッジボールを半分に切ったみたいな木の船に（宝）と書いた帆がはつてある。船にはへんなかっこうのおじいさんの人形がいくつかと、女の人の人形がひとつ、鎧をつけた男の人の人形がひとつ乗っている。おじいさんたちはみんな、にたあとわらっている。

「テレビの横、あそこがいいじゃろ」
ママがあわてたようにいった。